

課題番号	7-2-5	分野名	特用林産	予算区分	国庫
研究課題名	自然活用型特用林産物の生産技術の開発2 (自然栽培きのこの多品目安定生産技術に関する研究)【アラゲキクラゲ】				
担当者名	金田 佳隆 大橋 洋二		研究期間	平成19~22年度	

目的

昨年度までの試験により、アラゲキクラゲは品種系統による発生量の差が大きく、市販品種は収穫量が大きかったことが分かった。そこで本年度は各市販品種の発生量を調査し、かつ昨年度より1月早い6月中旬に伏せ込むことにより、収穫期間が延長されて増収が可能かどうかを検討することとした。また伏せ込み方法についても検討を行い、菌床に入れる切れ込みの方法について各検討を行った。

方法

培地は、広葉樹おが粉：米ぬかを重量比10：3で配合し、含水率を65%に調整後フィルター付きPP袋に1.0kg充填した。供試菌株は加川椎茸、キノックス、大貫菌茸（以下KA、KI、OHと略す）の市販品種を使用した。培養期間は45日間で、菌床の埋込は平成20年6月12日に行った。菌床の仕込み方法は、袋×印タイプ、袋/印タイプ、裸切れ込み無しタイプの3種類とした(図-1)。伏せ込みは栗林下のパイプハウス内で行い、地面にワラを敷きならし、各菌床を並べ、トンネルフレームを設置し不織布で覆った。

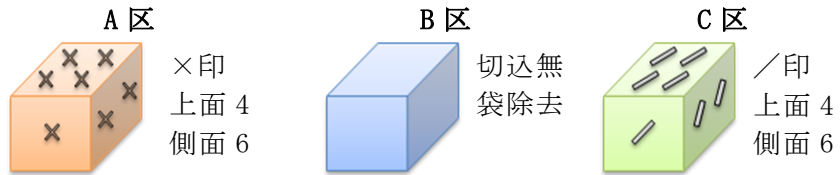


図-1 菌床の仕込み方法(各区12菌床)

結果概要

各収穫量は表-1のとおり。C区に比べ、A区で2割以上の増収がみられた。子実体はカッター

表-1 アラゲキクラゲ1菌床当たり収穫量(各区12菌床)

試験区	A区			B区			C区		
	KA	KI	OH	KA	KI	OH	KA	KI	OH
収穫量	52	54	81	68	30	37	41	32	59
発生率	92%	100%	100%	58%	58%	25%	92%	100%	100%

で切れこみを入れた箇所から発生していたことから、切れこみ延長の長いA区で収量が増加したことが考えられる。B区では菌床が裸になっていることから菌床の乾燥が促進され、発生率・収穫量とも低く、発生方法としては不適であることが分かった。またB区では主に菌床の側面から子実体が発生していた。各菌株の特性としては、大貫菌茸のものが高い収量を示し、A区において優位な差がみられた。加川椎茸のものはB区においても比較的高い収量を示したことから、乾燥に強い特性を持つと考えられる。

伏せ込み次期を早めることで収穫量が上がると想定したが、6月中に伏せ込みを行っても7月中の伏せ込みに比べて収穫量は上がらなかった。これは子実体の発生時期は7月中旬以降に限られ、早期に伏せ込んだとしても収穫期間が変わらなかったためと考えられる(図-2)。なおこれまでの試験データから、植菌した日から子実体の発生までに要した日数と収穫量の間には強い負の相関関係が認められ(相関係数 $r = -0.94$)、今後は適正な培養期間についても調査が必要と思われた。

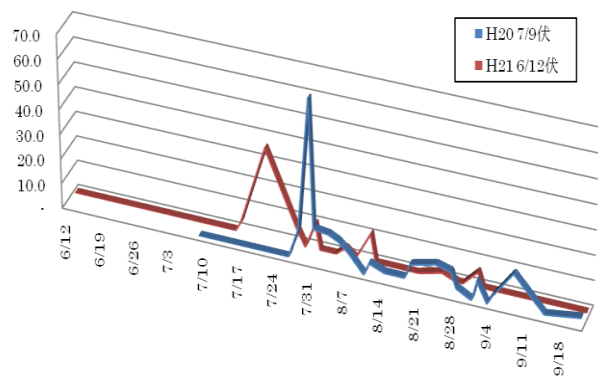


図-2 アラゲキクラゲ1菌床当たり収穫